

大学を卒業しようとしていた二〇〇二年、私は中国広東省のリンホウ村というハンセン病隔離村で、蘇振権（ソウチンクワン）当時七十四歳）というハンセン病快復者に出会った。蘇振権は老朽化した長屋の一室に住み、ハンセン病の後遺症で歩けず、手や顔が変形し、食べていくのがやっとの生活だが、常に微笑みを湛えつつ淡々と暮らしていた。隣の部屋には許松立（コウソンリ）という、手の指はなが歩けるという快復者が住んでおり、ふたりはお互の手足として支え合っていた。

蘇振権は許松立が育てた野菜を薪で料理し、いつも私に食べさせてくれた。少しの白酒（バイチュウ）を飲みながら、私は蘇振権と筆談を繰り返した。幼い頃に発病し、ひとり隔離村にやつてきた。労働が過ぎて歩けなくなつた。穏やかに語る彼の命の形に、私は心を打たれた。この出会いを通して、私は中国南部の隔離村八十ヶ所で無償でインフラ整備をする活動を二十年間行つた。その間に日中などの

長屋の一室に住み、ハンセン病の後遺症で歩けず、手や顔が変形し、食べていくのがやっとの生活だが、常に微笑みを湛えつつ淡々と暮らしていた。隣の部屋には許松立（コウソンリ）という、手の指はなが歩けるという快復者が住んでおり、ふたりはお互の手足として支え合っていた。



(撮影 吹田 哲二郎)



Open studio 紫馥堂 | SHIFUKUDO

京都市北区紫野東藤ノ森町 11-1

藤森寮 南棟 1F

「触れる彫刻」の注文制作を承ります。

tynoon@gmail.com



「暮らしを支える医療介護を創る」
(医) 永原診療会
京都市上京区千本五辻上る 5461-0636
制作 びーぶる編集部 vivreoffice@gmail.com

表紙のひと

原田 僚太郎 (はらだりょうたろう) さん
彫刻家

きらくや二はしいただきます



コロナ禍までは夏の恒例行事として行つていたそ
うめん流し。世の中も落ち着きを取り戻し、ようや
く復活できると、利用者の皆さんと準備を開始。切
り出した青竹を使って、何日もかけて人数分の器、
お箸を作りました。ところが、七月に入つて益々上
がり続ける気温に、やむなくそうめん流しはあきら

めることに。そうめん流しはできませんでしたが、
皆で作った竹の器とお箸は、昼食の器としてそうめ
んを盛り付けて召し上がっていただきました。青竹
の爽やかな色合いが涼しさを加え、猛暑を忘れるひ
と時になりました。

(文 田中)



平野神社前の様子

北区、上京区の西側は「御土居」がよく残つてゐる地域で
史跡が六ヶ所あります。このうち平野鳥居前町「史跡・御
土居跡」には周辺から出土した石仏が沢山祀られています。
「御土居」は、天正十九年豊臣秀吉によって造られた京都
の市街地を囲む堀と土塁の総称で、南北約八・五キロメート
ル、東西約三・五キロメートル、総延長約二十一・五キロメー
トルの京都で最も大きな人工構造物です。当初の出入口は十
か所程度で、北西には長坂口と寺之内橋口があつたと推定さ
れています。紙屋川を西限としたため、出来た当初は北野天
満宮と平野神社の間を大きな土塁が塞いでいました。この付
近を通り越えて往来し、幕府は「これを禁じて気づくたびに「道」
を塞いだ」とが「日代諸事留書」という史料に残されています。
北野天満宮の北限の道を平野神社方向に歩いていくと、石仏、
土塁、天神川、高低差などが体感でき、おススメです。なお
この道が開通したのは元禄十四（一七〇一）年、買い物に行
く度に、江戸時代に道を作つてくれて良かつたと思つています。

参考文献：中村武夫『御土居堀ものがたり』京都新聞センター2005

京都昔さんぽ

御土居① 一ぐるりと囲むといふことは一

赤松佳奈

